後

入学試験問題

総合科目Ⅲ

（配点一〇〇点）

平成二十六年三月十三日　九時三〇分～一一時三〇分

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
二、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手をあげて監督者に知らせなさい。
三、解答には、必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用しなさい。
四、解答用紙は縦書きにして使用しなさい。
五、二枚の解答用紙が渡されるが、解答は、問題ごとに所定の解答用紙に記入しなさい。青色刷りの解答用紙が第一問用、茶色刷りの解答用紙が第二問用です。所定の解答用紙に記入されていない解答は無効です。
六、各解答用紙の指定欄に、受験番号（表面二箇所、裏面一箇所）、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
七、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
八、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。
九、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
一〇、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
一一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

◇M11(316—281)

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

◇M11(316—282)

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）

第一問　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

健康という言葉が日本に現れたのは明治中期以降です。それ以前は、心身を安寧な状態に保つことを「養生」という言葉で語っていました。明治政府の近代化路線で、西洋医学が入ってきたときは、まず「衛生」という言葉でその考え方を引き受けました。衛生は、何らかの形で生活を改善することによって心身の安寧を得るということで、それが現在の健康と同じような意味で使われ始める。しかしその後すぐに健康という言葉が使われ始め、衛生に取って代わる。

明治政府が、東洋医学の養生の概念をわざわざ否定し、西洋医学の衛生・健康という概念を持ち込んで何がやりたかったのか。もちろん病気を予防するためとか、町をきれいにするというのもありましたが、究極は人を管理するためだった。その点、日本は近代医学の本家のヨーロッパより、もっとラジカルに「近代医学による人民管理」という考え方を取り入れました。まず最初にやったのが徴兵検査。そして「まず健康！」とかいうスローガンをつくって、ポスターなどにする。お国のために健兵をつくろう、そして労働生産のために健康な国民をつくろうということです。

国民は健康体でなければならない。健康でない人間は非国民だと。そこには明らかな優生学の発想があって、健康概念を使って（優生学的視点からの）ダメな人間を排除し、（優生学的視点からの）ダメな子（健康でない子）が生まれないようにするという優生政策が行われることになるわけです。

このように、国家権力と健康言説が強く組み合わさって政策の推進が図られていく。医学は後からちょこちょこ来て、その流れに追随する理論を提示するにすぎないともいえます。近代国家以前の国家でも、たとえばプラトンは『国家論』で、国民は健康でなければいけない、ダメな子が生まれるのは中絶して阻止しようということをいっていて、健康言説との結びつきをうかがわせますが、近代国家＝国民国家は、健康言説抜きでは語れないといってよいほど、その結びつきは強いんです。

近代国家の至上命題は、人民を管理することです。なぜなら国の富はすべて国民がつくり出すからです。近代国家にとっては、国土に資源があるとか土地が広いというのは二次的なことで、問題は労働できる人間がどれだけいるかなんですね。いくら

資源があっても、それを掘ってきてモノにする人間がいなければ富は生まれない。そのような活動をする生きとし生ける人、それは名前のある人ではなく、集団としての人、これを「人口(population)」というのですが、まさに人民集団(人口)によって初めて国民国家は成立する。それが近代国家の本質です。

近代国家による人民の管理、それをフーコーは、「生－政治」あるいは、「Ｂｉｏの権力」という概念で説明しました。近代国家が人民を管理する社会統制機構として、まず必要なのは法システムであり、そのために近代国家は、緻密な法制度と法の執行施設としての裁判所や刑務所などの施設がつくられる。しかし生きている人間を管理するためにはもう一つの社会統制システムが必要だった。それが「制度化された医学」です。近代国家は、一九世紀中頃、ちょうど体系ができ上がりつつあった近代医学を、「この医学だけが国家の認める医学である」と「制度化」してしまいます。これが「(近代)医学の制度化」であり、別ないい方をすれば、「医学の国家支配」であり、「近代医学の国家医学化」です。要するに、近代国家が医学を子飼いにするんです。近代国家は、この制度化された医学を、生きとし生ける人々を管理する、もう一つの社会統制システムとして採用するわけです。一九世紀末までには、西欧諸国の近代国家は、すべて近代医学を制度化します。

明治政府は、ヨーロッパで確立された医学の制度化のシステムをそのまま持ってきます。一八七四(明治七)年、医制を布いて、医師を専門職として国家資格にし、その資格のある医師は近代医学(西洋医学)の医師だけにする。もともと医療者としては、漢方医をはじめ、鍼灸師、あんま、接骨医、民間療法師、占い師からお祓い屋、加持祈祷での宗教者まで、たくさんの医療者がいた中から、近代医学の医者だけを、国家が認める医師として、そのほかの医療者は、医師として認めないで、医療行為を禁じたのです。

近代国家での医療の制度化は、まず、(医師組合や医師会などの医師集団ではなく)国家が医師を認定する制度をつくります。そして次に、医師だけが執行できる制度をつくっていきます。まず出生証明書(届)や死亡証明書(届)には、医者のサインを必要とするようにした。それまでは産婆や家族など誰が届けてもよかったんです。これにより、国民としての、まさに入り口と出口を医者(医学)の管理下に置いた。そしてその真ん中は、医療で管理する。医療法や病院法といった法律をどんどんつくって、医学

(医師)の医療のやり方、内容を国家が管理して、そのような医学の医療を通して、人々の病気から生活までの管理を強めていく。こうしてすべての人間が生まれてから死ぬまで医療の支配下に置かれる。国家が医学をもって人々を管理する統制システムが、まさに歴史的に生み出されるわけです。

このシステムのもとでは、健康でない人間は国民になることを拒まれ、健康でなくなった人は国民であることをやめさせられ、国民たる健康な人々にはより生産的に生きるよう強制する。その根本には、われわれの仲間は優れた人種でなければならないという優生学的発想があり、それによってシステムが最もうまく稼働する。だから医学が制度化されると、次に優生政策が出てくるのは必然なんですね。

ヨーロッパでは一九〇〇年前後から優生政策が普及します。日本では一九一〇年代から三〇年代にかけて国民優生法をベースに、ダメな子が生まれないよう中絶を強要し、ダメと見なした人間は収容する。たとえばハンセン病の患者や精神障害者は隔離収容されます。それ以外の人間に対しては、もっと働けといって健康を強制する。「まず健康」というポスターが工場や町中に貼られたりする。このように戦前は国家と健康言説が優生政策と一緒になって連合体をなしていた。

戦後、優生政策は表向きは消えますが、国家が医学を管理し、医学が国民を管理するというシステムは続きます。でも、やはり優生政策がないとやりづらいわけですね。日本人は優秀な人種でなければならないと、表立ってはいえない。それで雌伏数十年、再び一九七〇年代から国家が健康を主張することによって、管理システムを強化していこうとする。

戦後の健康政策は、最初は結核やコレラといった感染症を排除し、病気を予防することが目的でした。つまり目標はゼロ点としての健康です。その時代が終わると、さあ今度は健康をプラスにしよう、健康増進の時代だと、政府、国を挙げてのヘルスプロモーションが始まる。

感染症の死亡が見かけ上少なくなると、国民の死亡原因として脳卒中、がん、心臓病などが目立ってくる。これを国は成人病と名づけ、「早期発見・早期治療」によって病気を減らそうとしていく。成人病というのは政府がつくった官僚用語で、日本だけ

の言葉です。それに対して、医学は最初、「成人病？　adult diseases って性病のこと?」なんていってバカにしていた。ところが医学は国家の支配下にあるので、国家が牛耳っているお金がないと何もできない。それで医学においても成人病研究が始まり、「成人病」は医学用語にもなっていく。

一段落すると、次は予防です。病気を減らすだけでなく、病気になる前の人間の生活を管理して、病気を予防し健康を増進しようと。そこで使われた、国家が考え出したのが「生活習慣病」という概念です。生活が病気をつくるのだから、生活を正すことで病気は予防できる、だからあなた方は、国家＝医学が指示する清く正しい生活をしなさいよという、見事な管理システムができ上がるわけです。

医学は、国家側から生活習慣病という概念が出てきたときに、また、「病気はすべて生活習慣病だろう、何が生活習慣病ですか」とうそぶいていたんですが、やはり生活習慣病の研究というとお金がぽんぽんつくので、わっと群がって、生活習慣病概念を医学の中に取り入れ、医学の言葉になる。だから成人病も生活習慣病も外国の医学の用語にはありません。こうして国家医学たる医学は常に国家の人民管理の後づけで意味づけをやらされる。

（佐藤純一「健康言説を解体する」より。表記等に若干変更を加えた。）

問一　近代国家における西洋医学の役割について、著者の主張をまとめなさい（五〇〇字以内）。

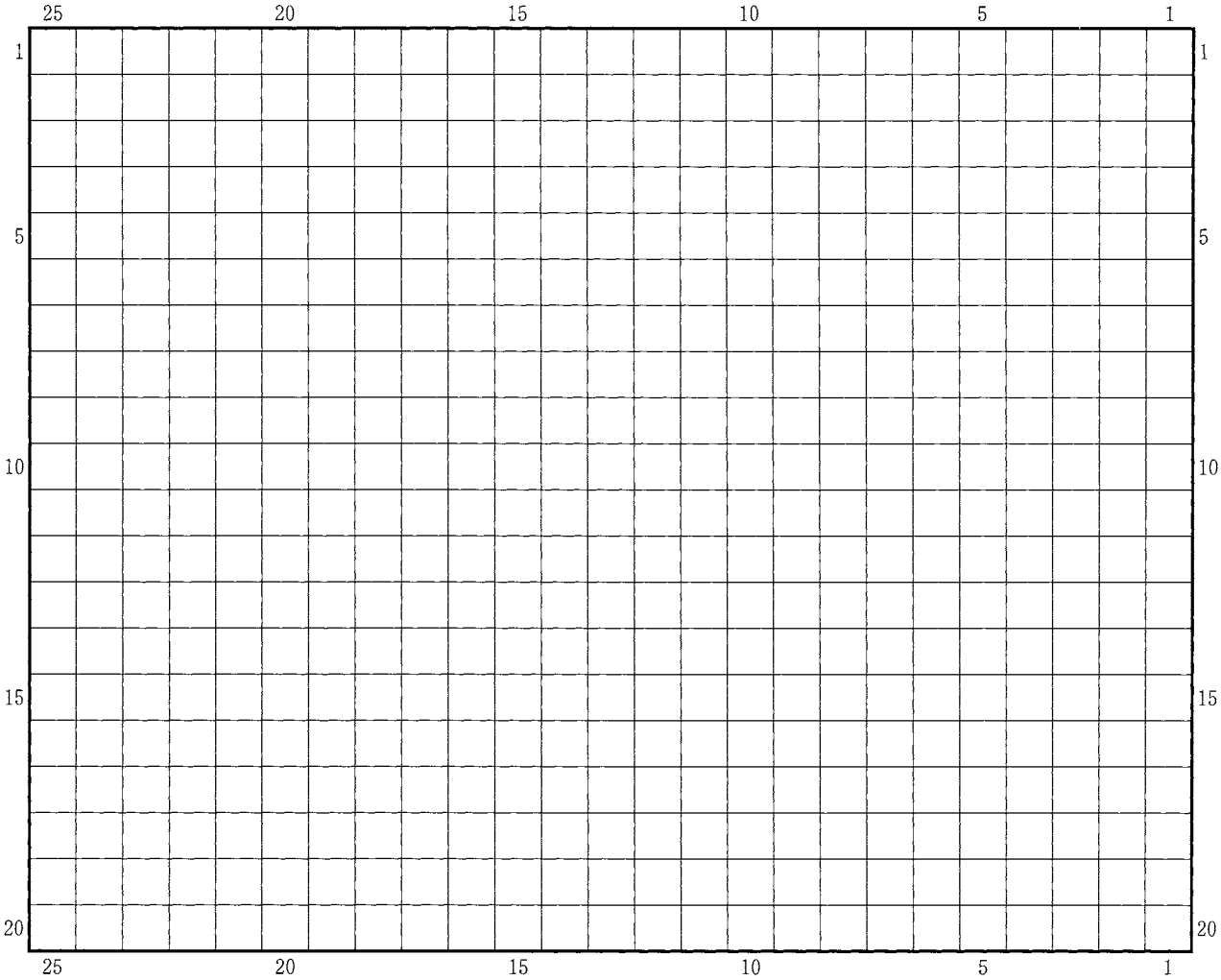
問二　現代の日本社会において、「健康」という概念は私たちの生活にどのような影響を及ぼしているか、あなたの考えを説明しなさい（五〇〇字以内）。

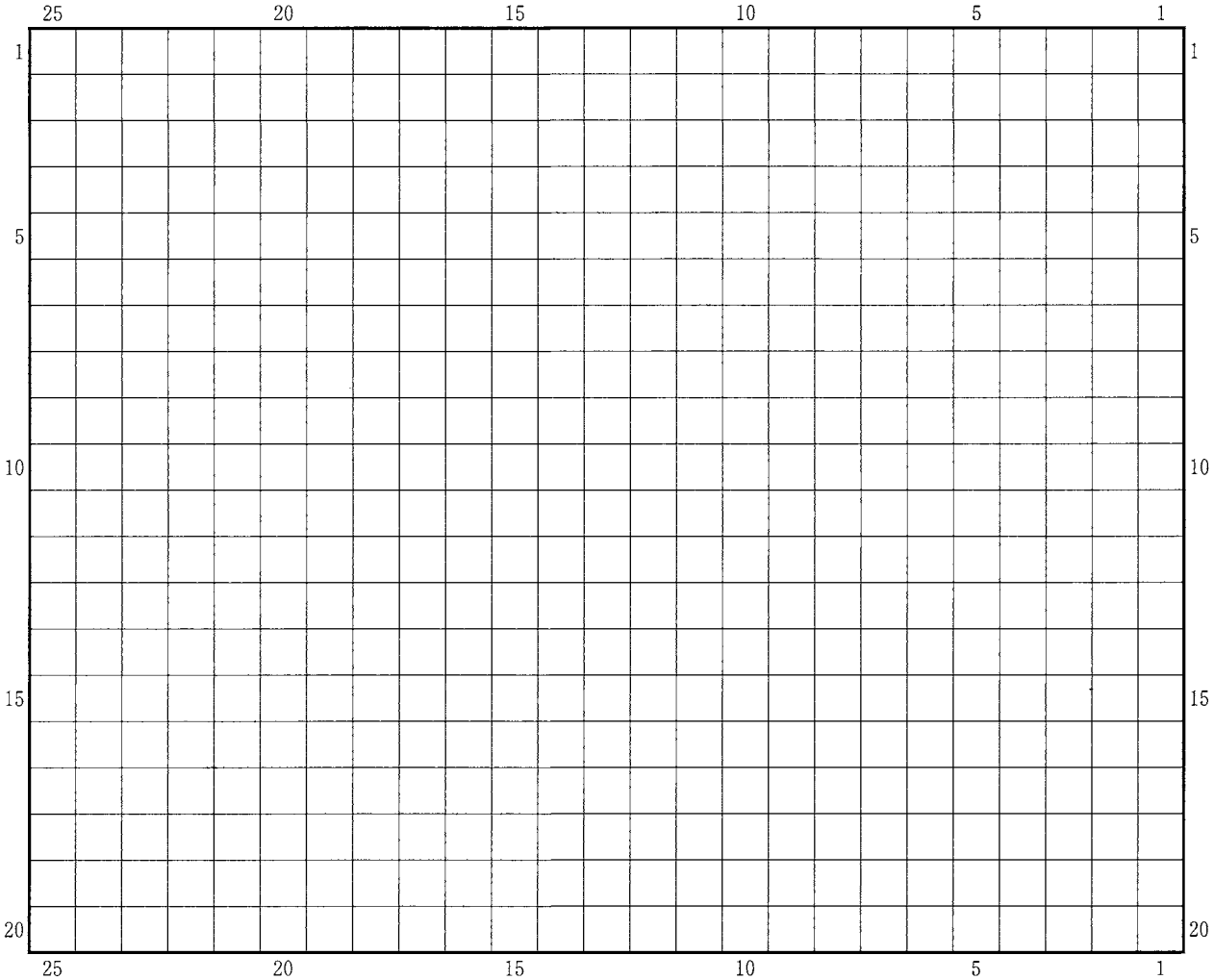
草稿用紙

（切り離さないで用いよ。）

◇M11(316—288)

草稿用紙（切り離さないで用いよ。）


25
20
15
10
5
1
1
5
10
15
20


25
20
15
10
5
1
1
5
10
15
20

第二問　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「知識人」という言葉がある。「誰某は最後の知識人であった」といったぐあいに、現代では「最後の文士」や「最後の傷痍軍人」といった言葉とほぼ同じように、新聞の死亡欄に登場する言葉かもしれない。だがこの言葉について、われわれは正確に検討することを長らく怠ってきた。

十九世紀の終わりにパリでユダヤ人ドレフュス将軍の冤罪事件が問題となり、エミール・ゾラを初めとする少なからぬ作家や批評家、ジャーナリストたちが彼を弁護する論陣を張った。このとき「知識人」という言葉が考案された。もっともそれはゾラたちがみずからを呼んだのではなく、敵対する反ユダヤ勢力側が彼らを貶めるために用いた呼称であり、きわめて強い軽蔑的なニュアンスをもっていた。雰囲気を再現してより正確に翻訳するならば、「知識野郎」とか「インテリ気取り」といった日本語の方がいいかもしれない。要するに最初から知識人は、人に馬鹿にされる少数派として出発したのである。

大衆はつねに多数派であり、表立って個人として意見を口にしない。彼らはただ知識人が勇気をもって発言するとき、それを安全地帯から冷笑し、足を引っ張ることしかしない。その態度は、『男はつらいよ』という国民的喜劇映画のなかで主人公の寅さんがいう科白に典型的に現われている。彼は対話の際、自分の理解を超えた言葉を相手が口にしようものなら、「てめえ、さしずめインテリだな」とすかさず半畳を入れ、対話の腰を折ってしまう。自分の無知を開き直って居並ぶ者たちを味方につけてしまい、対話相手にむかって罵倒を浴びせかけるのだ。そしてこの粗暴な戦略ゆえに、『男はつらいよ』シリーズはつねに大衆的人気を獲得し、渥美清は国民的俳優となった。

誰も好き好んで知識人になろうとする者はいない。ただやむにやまれぬ鉄の部屋といった状況のなかで、たまたま人よりも先に目が醒めてしまった者に、思いがけずも知識人という役割が振り当てられてしまうだけである。あえていうならば、「運悪く」という形容を付けてもいい。知識人になるためには特別な才能が要求されるわけではない。それは職業でもなければ、いわんやカーストでも公式的な資格でもない。ある一人の平凡な人間を知識人たらしめるのは、ひとえに緊迫した状況とほんのわずかの

勇気だけである。

人はいつでも知識人になることができ、いつでもそれをやめることができる。生きているかぎり永遠に知識人であり続けるということは、不可能なことだろう。というのも彼を知識人として必要としていた社会とは、刻一刻変化してゆくものであり、ある状況下にあっては知識人であった人でも、次の状況ではそうあり続けることが無意味となることがあるからである。わたしにはサルトルのような哲学者の過ちは、ここにあったように思われる。彼は世界中のあらゆる問題に対し、いつ何時でも知識人として振舞うのが自分の責務であると信じ、誠意をこめてそれを全うしようとした。強靭な意志がないとできない決意だとは思う。彼はアメリカのヴェトナム侵略に反対して街頭でビラを配り、ヴェトナムが勝利を収めると今度は過去の敵対者と組んで、ボートピープルを救えというビラを配った。だがいかにサルトルが偉大な存在であったとしても、知識人とは実のところ一時的な存在なのだ。彼はひとたび役割を終えてしまうと、無名の人々の群れのなかに静かに戻ってゆくべき人間の状態ではないかと、わたしは考えている。

知識人とは単に知識を持っている人間を意味しているわけではない。もしそうであるならば、魚河岸で働いている作業員も、理髪店主も、レストランの料理人も、魚と頭髪と肉の焼き方について豊かな経験と知識をもっているから知識人になってしまう。そうではなく、知識人とは、自分の専門の領域以外の知識を所有していて、それを社会のために行使する人間のことである。その意味でもっとも知識人になることが難しいのは、大学で社会科学や哲学といった人文系学問を教えることを職業としている人間だろう。彼らはそれを専門的知識として蓄積し、教育という労働行為の資本として活用することはできても、それを大学の塀を越えて現実に活用することがまずできないからだ。なまじ覚えた学問という枠組みが彼らをそうした行動から阻んでしまうのである。彼らの発言は専門の知識に庇護されることはあっても、その知識の背後にある秩序を相対化することがほとんどない。だから大学教授が知識人となるためには、駱駝が針の目を潜る以上の努力を重ねなければならない。

もう少し知識人について考えてみると、彼は完璧な理論家でもなければ、完璧な実践家でもない。むしろその中間にあって、

相対立するこの二つの作業を結合させ媒介する存在である。モノを書くことと行動することの両方を、どちらに重点を置くこともなく曖昧に行なうことが大切とされる。具体的にいうならば、これまで自分に似つかわしくないと考えられたことを、面倒臭さを省みず引き受け、自分の利益にも業績にもならないことを買って出ることが肝心だということである。何もわざわざあんなことまでしなくても……と人に陰口を叩かれることこそ、知識人の条件であるかもしれない。アマチュアであることが知識人の第一条件であると、かつてエドワード・サイード[注]は語ったことがあった。専門的な知識は知識の順列と秩序を確認させるだけで、もっぱら人を抑圧する。そうした構造に風穴を開け、アンデルセンの童話の子供のように、王様は裸だと宣言するためには、人はあえて素人の立場に身を置かねばならないのだ。

知識人はある瞬間にあって、自分の信じえたある正義のために抗議をする。犠牲者について語り、彼らが被った不正義について人々に呼びかける。だがそれは、先にいったように、永続的なものではない。どこまでも瞬間的なものだ。それで充分であるし、人間には結局のところ、それしかできない。いつまでも正義を唱え続ける者は、必然的に党派の争いに巻き込まれてしまうだろう。党派は権力への意志であり、硬化した正義はもはや正義ではない。ソヴィエトにせよ、アフリカの新興国家にせよ、あらゆる革命や解放闘争がその後どのような悲惨や抑圧的体制を生み出したかを想起してみれば、このことは明らかである。

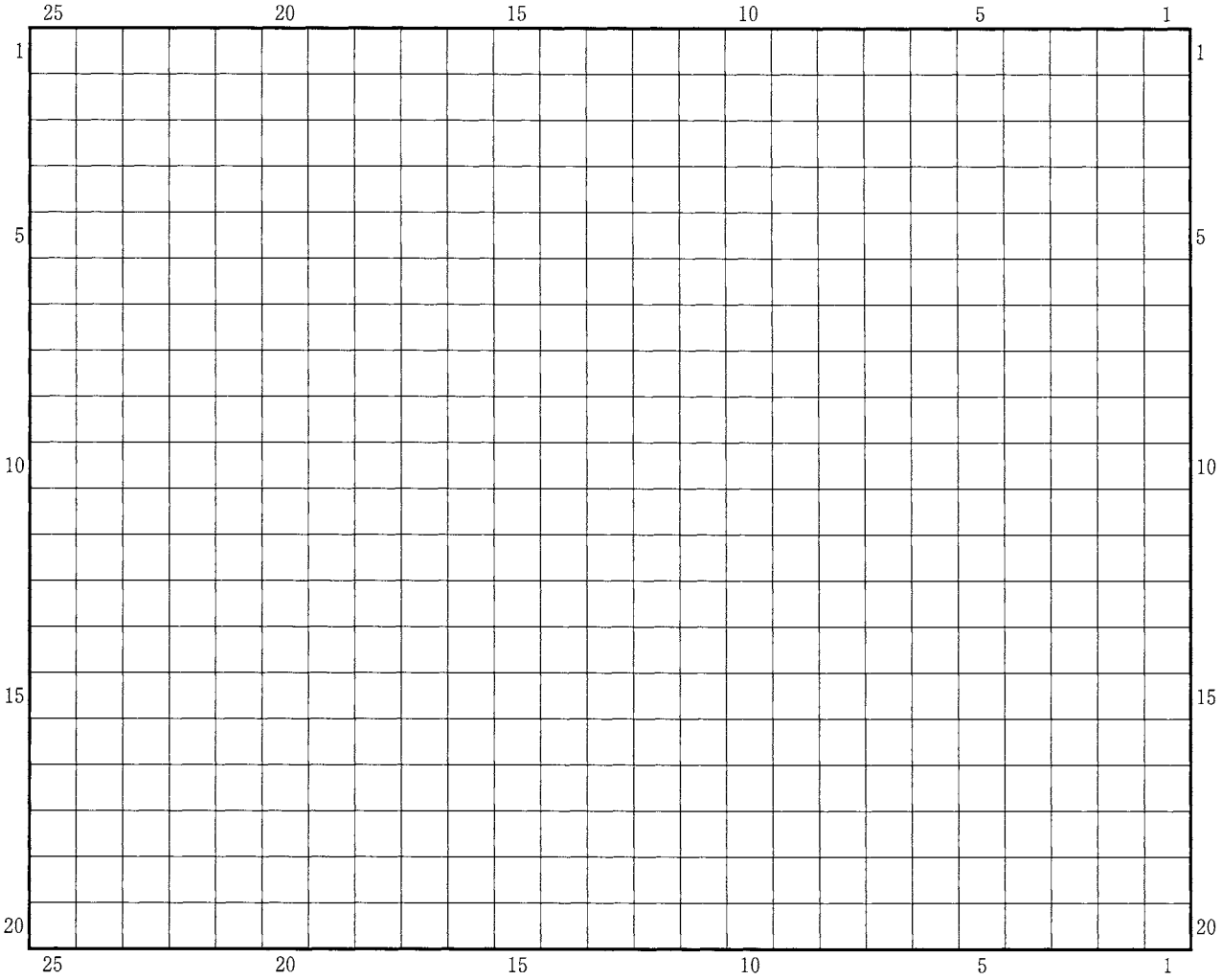
いつまでも自分が知識人であると名乗り続けることは滑稽であるし、「知識人として」といった前置きで演壇に立つことは、それ以上に愚かに思える。知識人は誰かによって自分が聖人化されそうになったとき、ただちに警戒して撤退すべきだろう。というのもそれは誰かによって、ありえぬ権威として利用されるだけのことだからだ。鉄の部屋で目醒めてしまった人間は、ただ一声、大声を出すだけで充分であった。王様は裸だと叫んだ子供は、その無垢にして勇気のある発言だけで充分であった。知識人であるとは事件であり、事件については誰も予期することができない。ましてそれを理論化したり、職業にすることなどできない。

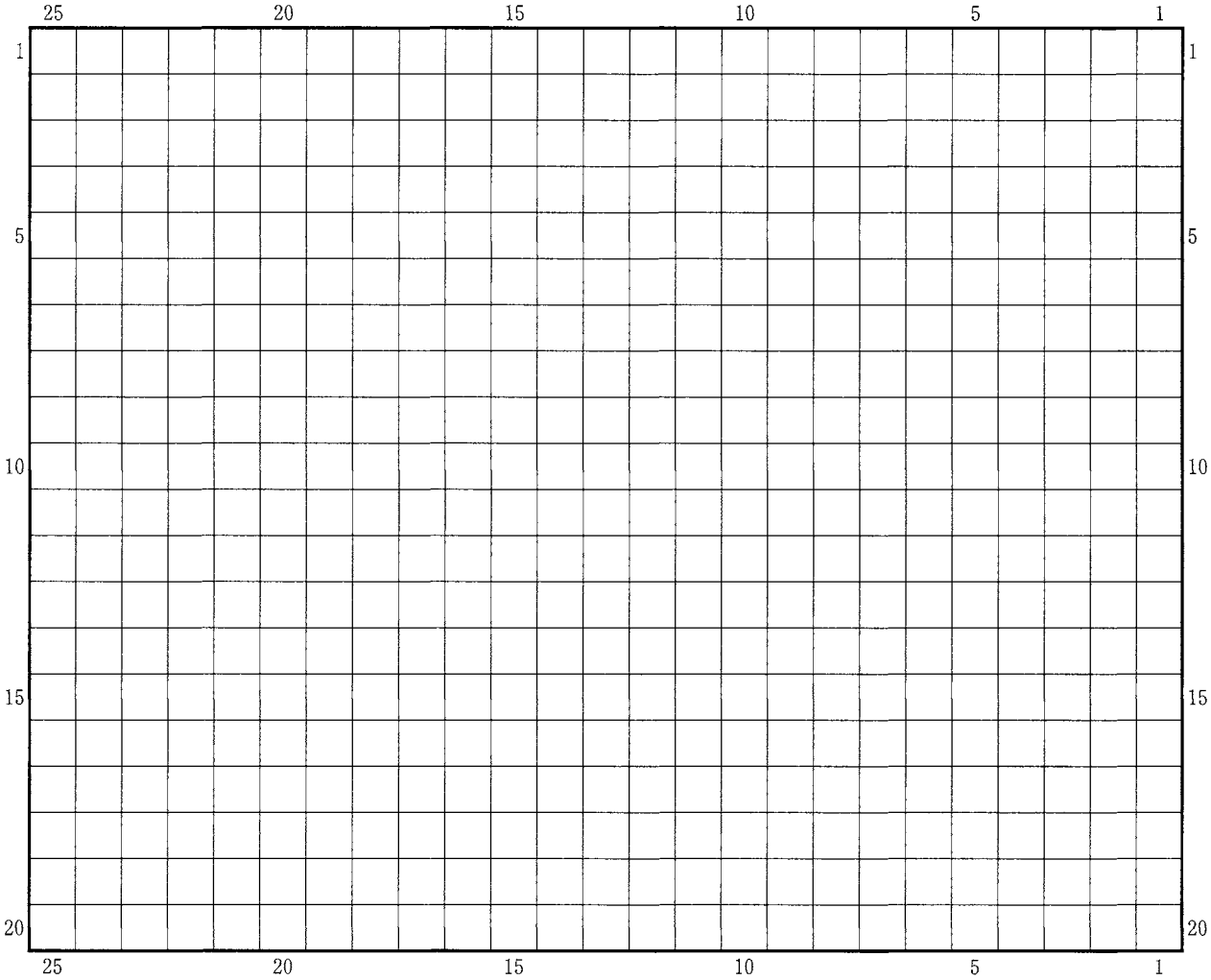
（四方田犬彦『人、中年に到る』より。表記等に若干変更を加えた。）

［注］ エドワード・サイード　パレスチナ生まれの批評家。著書『オリエンタリズム』他。

問一　著者の「知識人」に関する考えを踏まえた上で、近代日本における知識人の特質について、近代史上の人物を取り上げて論じなさい（五〇〇字以内）。

問二　著者によって提示された「知識人」像は、現代社会においてどのような意味をもつか、どれだけの有効性をもつか、考察しなさい（五〇〇字以内）。


25
20
15
10
5
1
1
5
10
15
20


25
20
15
10
5
1
1
5
10
15
20